本棚

生源寺眞一　編著

『21世紀の農学
―持続可能性への挑戦―』

本書は、「持続可能性」をキーワードに、農学が挑戦する諸課題を農学初学者向けテキストとしてまとめたものである。

そのコンセプトは、2019年３月に日本学術会議が公表した「農業経済学の学部教育のあり方」（https://www.scj.go.jp/ja/info/kohyo/pdf/kohyo-24-h190313.pdf）のエッセンスと共通している。同報告では、食料・農業・農村をめぐる社会的な価値や位置が大きく転換するなかで、農学、とりわけ農業経済学教育がカバーすべき領域の拡大とカリキュラム構成の見直しが提起されている。本書の編者である生源寺眞一氏は周知のとおり福島大学食農学類の開設、新たな教育カリキュラムの構築に尽力されてきた。カリキュラムに適した新たなテキストも合わせて必要とされたことが本書の創作につながっていると推察する。

本書は、農学の拡大領域として「食料」「資源・環境」「技術革新」「地域社会」の４つをとりあげ、そのもとで具体的なテーマを論じる12の章で構成されている。それぞれの分野の第一人者が過去の学問的な蓄積を踏まえたうえで今日的な課題を解説しており、各章が独立した論考としても読み応えのある内容となっている。

加えて本書の全体構成には、学びを深めるための工夫も凝らされている。例えば、Ⅱ部「資源・環境をめぐる挑戦」では、第一次産業の源泉となる自然資源の管理のあり方について、資源の利用・再生の時間軸が異なる農業、水産業、林業を比較している。また、世界の食料需給に関する４章、環境と農業の関わりについて論じる９章、国際課題としての食料問題と国際協力についてまとめた10章を重ね合わせることで、地球規模での食料・農業問題の構図がより明確に浮かび上がってくる。

さらに、本書には編著者の教育や研究に対する基本姿勢も随所に現れている。そのひとつが用語の定義や概念を大切にしていることである。本書のキーワードである「持続可能性」の概念の解説をはじめとして、各章においても理解を深めるために重要な概念、キーワードには丁寧な解説があり、大学生が人文社会科学の考え方の基礎を学ぶうえでも有益なものとなっている。

さて、持続可能性が問われる農学領域の課題に関する編者の基本的な考え方は「その解決に向けて複数の目的を同時に追求する必要があり、『二兎を追ってできるだけ高いレベルで二兎を得る』構図」とされているが、持続可能性をキーワードとする本書もその性格を帯びている。すなわち、１つ目の目的が「21世紀の農学教育にふさわしいテキスト」であるとすれば、２つ目のそれは「農学領域の課題解決に向けて果たすべき人文社会科学系農学の役割発揮」であろう。編者は「重要度が高まりつつある課題を識別し、わかりやすい見取り図を提示する」ことを人文社会科学農学の使命のひとつとしているが、その使命は社会構造が複雑化し、玉石混交の情報が溢れる現代社会においてますます重要性を増している。そして、本書はまさにそれを体現する一冊となっている。

ところで、本書の主たるターゲットは農学初学者とされているが、すでに農業、農学に関わる者が情報をアップデートし、頭を整理するための書としても非常に有用である。多くの方々に、本書の神髄に触れていただきたい。

――培風館　2021年11月

定価2,970円（税込）225頁――

（主任研究員　小針美和・こばり　みわ**）**

農林中金総合研究所
https://www.nochuri.co.jp/